



国を越えて、 恩返しのパトンリレー

茗溪学園高等学校2年

ながみね あんり

長嶺 安里さん

はじめに

私は岩手（盛岡市）で生まれ、その後ドイツで過ごし、小学生時代は英国、そして茨城（つくば市）で暮らした。今、私は家族と共に再び英国に住んでいる。父の転勤が多かったため、ドイツ、スウェーデン、インドネシア、中国、韓国と、世界中に「家族」と呼べる友人がたくさんいる。そこで幾人かの家族との関係を紹介しながら、英国で考えた家族のあり方について提案したい。

1. 外国での「家族」

～必要なときにそばにいる大切さ～

私が小さい頃、お世話になったドイツ人の夫婦がいる。私にとってお祖父ちゃんお祖母ちゃんといってもいい人達だ。当時、私は2歳、姉は6歳。両親は言葉も通じない、誰も知らない場所で大変寂しい生活だったそうだ。母がこの婦人から料理を習い始めたのがきっかけで、毎日のように遊びに行くようになった。彼らがいなければ、私達はドイツという国を好きにはなれなかったと思う。

そして、スウェーデン人とインドネシア人の2家族との出会いは私が生まれる前の話だ。姉がまだ小さかった頃、父の赴任先のカナダで家族ぐるみで一緒に子育てをし、誰も頼る人のいない異国で助け合った、今でも大事な人達だ。互いに必要なときにそばにい

ることが大切なのだろう。また誠意を持って接すれば、宗教や慣習の違いも関係なく分かり合えるということも彼らは教えてくれる。

今、私は英国エディンバラの現地校に通っている。同じ学校で姉妹のように仲の良い友人達がいる。この学校には海外からの留学生も多く、香港、韓国からの子は12、13歳から親元を離れ寮で生活をしている。彼女達は日本に非常に興味を持ち、よく家に遊びに来て一緒に食事をする。そんな時、母は留学生達の母となり、みんな年上の人を「お姉ちゃん」と呼ぶので、我が家は大家族となる。一緒に食事をする時、その人との距離が近くなり、より理解し合える気がする。

2. 大きな家族の中で教わること

～身近にあった助け合い～

茨城（つくば市）で知り合った韓国人のウンシルさんの家族を通じて私は多くのことを学んだ。彼女達に出会ったことによって、人生の歩み方が変わった気がする。特に人と人との助け合いについて考えるようになった。日本人男性と結婚したウンシルさんは、出産前はもちろん、その後も生まれたばかりの赤ちゃんを連れて我が家へよく来ていた。学校から帰って、彼女の車が家の前に停まっているのを見つけると、うれしくてワクワクした。そして私は、赤ちゃんのオムツを替えたり、おぶって寝かせたりとお世話をした。

ある時ふと、私のように赤ちゃんに接する機会のある高校生は現在どれほどいるのだろうかと考えた。昔ならば、兄弟も多く、家の近くに親戚がいて年上の子が年下の子の面倒をみるということはよくあっただろう。しかし、今は兄弟も少なく、こんな経験のある若い人もあまりいないのではないだろうか。私は赤ちゃんに関わることで、子どもの可愛さ大変さ、そして親がどれだけ愛情を私にかけて育ててくれたのかということが身に染みて分かった。

近年、親がストレスのあまり赤ちゃんを自ら殺してしまうといった悲しい事件が起きているが、私のように若い頃に子育てについて学ぶ機会があり、さらに周囲の人が手を差し伸べてあげれば起こりえないことだと思う。

3. 誰かに恩返し

～世の中はそうやって回っている～

ウンシルさんは妊娠中に何度か入院したが、そのたびに母は毎日のように彼女の好物や韓国料理を作って病院へ通った。私は、なぜ母がこんなに楽しそうに、そして自然に彼女達の子育てを助けられるのか不思議だった。大好きな人達だからということもあるが、それだけでは納得いかなかった。尋ねてみると、答えは意外とあっさりしていた。「私達も同じように助けられてきたのよ」

岩手で私が生まれた頃、母もウンシルさんと同じように近所の人に助けられたそうだ。4歳の姉と生まれたばかりの私の子育てに追われていた時、近所のおばさんが夕飯を作ってくれ、さらには喜んで姉の面倒

をみてくれた。そして感謝する母に、おばさんはこう言った。「(遠くに住む)私の両親が近所の人に助けられているから、あなた達のお手伝いをすることで、私の気が楽になるのよ。だから、私に返さなくていいからね。いつかあなたが出来る時に別の誰かにしてあげて。世の中はそうやって回っているでしょう?」。母はこのおばさんがやってくれたことを次の世代のウンシルさんに返している。

4. 助け合う心が世界を変える

～英国で考えた家族のあり方～

英国では血縁を越えた家族的な人間づきあいを大事にしていると思う。こちらでは両親が白人でも黒い肌の子どもをよく見かける。争乱、離婚など理由は様々だが、親を失った子どもを、肌の色そして国を越えて養子として引き取る夫婦がいるのだ。またチャリティーショップも多く、各家庭で不要な物を無料で提供してもらい、それを売って、色々なチャリティー活動の基金にする。全てボランティアの人達によって運営されていると知り非常に驚いた。英国には途上国の人の援助、ガン患者やホームレスの支援など様々なチャリティーショップがあり、血縁を越えた助け合いの姿勢を強く感じる。

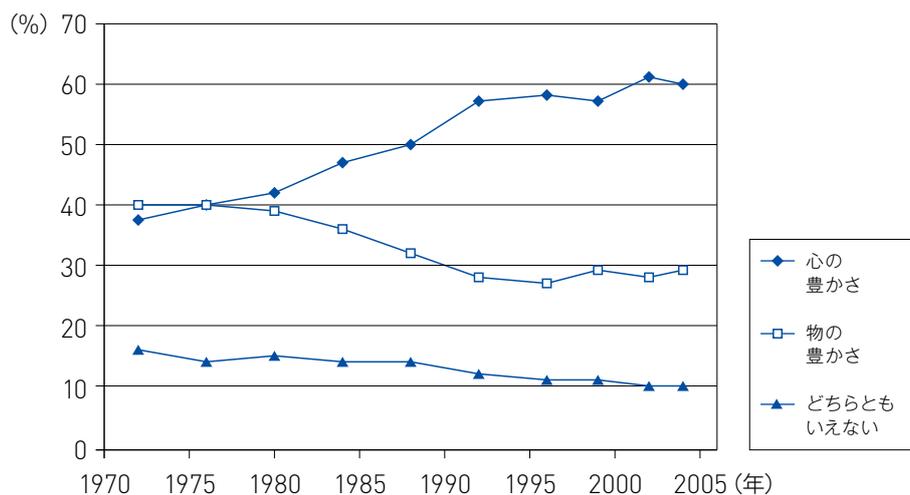
私はチャリティーに参加する英国人の気持ちも岩手で私達を助けてくれたおばさんの気持ちも、形は違うけれど元は同じだと思う。特定の人だけと的一对一のGive and Takeではなく、誰かからもらったものを次の人へ渡すという、新しい形の社会が必要だ。現在の日本は、欲しい物が簡単に手に入る便利

な時代であり、むしろ便利すぎるくらいだと海外にいるとよく思う。しかし、経済的に豊かになるとゆとりがなくなり、人々の心は貧しくなっているように感じられる。世論調査の結果からも人々が物より心の豊かさを求めることが分かる(図1)。この社会の中で、一人ひとりの小さな助け合いの気持ちは、世の中を変える大きな力になっていくと思う。誰かに助けてもらった人は、次はどこかで誰かの役に立とうと思い、大勢の人が鎖のように繋がる。私はこの恩返しはバトンリレーと似ていると思う。次から次へバトンを受け継ぐ順番があるのだ。私にもいつかこのバトンを受け取る日がやってくるだろう。その時は、「お互い様」

と言って自然に人を助けられるおばさんや母のような人間になりたいと思う。

「助け合いながら、生きる」それはまさに、動物が長い間生きてきたなかで得た素晴らしい力なのではないだろうか。苦しい時でも率先して誰かを助けることができる人は、心が豊かで真の強さを兼ね備えた人だと思う。大勢の人ががゆとりを持ち、このようになれば、本当の意味での豊かな国、さらには世界になれるだろう。10年、100年……時間がかかるだろうが、いつの日か世界中の人々が恩返しのバトンリレーのメンバーとなり、心豊かで思いやりにあふれた社会ができることを願う。

図1) 心と物の豊かさ



「今後の生活で心の豊かさと物の豊かさのどちらに重点をおくか」と質問したところ、70年代前半は「物の豊かさ」と答えた人が「心の豊かさ」という人よりも高かった。しかし、80年には「心の豊かさ」が「物の豊かさ」を上回り、2005年には「心の豊かさ」は63%となり、「物の豊かさ」は30%まで低下している。

H19年度版 国民生活白書より作成